

一般演題) MRSA 敗血症・肺炎患者に対するアルベカシン硫酸塩の有用性に関する検討
— 多施設共同研究 —

¹東京医科大学、²北里大学、³東京女子医科大学、⁴埼玉医科大学、⁵千葉大学、
⁶帝京大学、⁷日本鋼管病院、⁸獨協医科大学

○松本 哲哉¹、花木 秀明²、木村 利美³、根本 学⁴、織田 成人⁵、
秋山 暢⁶、宮尾 直樹⁷、吉田 稔⁶、相馬 一玄²、大屋敷 一馬¹、鈴木 幸男²、
新井 隆男¹、池上 敬一⁸、一和多 俊男¹、小林 昌宏²、戸塚 恭一³、砂川 慶介²

【目的】アルベカシン (ABK) は、MRSA 感染症の治療に広く使用されているアミノグリコシド系の抗 MRSA 薬である。薬効は最高血中濃度 (C_{max}) と相関しており、その標準的な目安は $9\sim 20\mu\text{g/mL}$ と考えられていることから TDM を実施しているが、目標血中ピーク濃度 (C_{peak}) に着目した研究報告はまだ少ない。

【方法】2008 年～2011 年 6 月までに、MRSA による肺炎または敗血症 (またはその疑いがある) 患者を対象に、投与開始時の目標 C_{peak} を $15\sim 20\mu\text{g/mL}$ に設定し、TDM による調整を行いながら、その有効性と安全性との関係についてプロスペクティブに検討した。

【結果】11 施設から 89 症例の登録があり、MRSA の検出された 29 症例を有効性の解析対象とした。投与量の増加に伴い、有効率が高くなる傾向が認められ、 $5\sim 6\text{mg/kg}$ の投与量以上での有効率は 95% (19/20 例) であった。初回平均投与量およびその時の平均 C_{peak} はそれぞれ 306.9mg/日 (5.6 mg/kg , range: $150\sim 450\text{ mg/日}$)、 $16.2\mu\text{g/mL}$ (range: $7.50\sim 35.3\mu\text{g/mL}$) であった。疾患別の有効率は、敗血症 87.5% (7/8 例)、肺炎 90.5% (19/21 例)、全体では 89.7% (26/29 例) であった。初回 TDM 時の C_{peak} より最終 TDM 時の C_{peak} が上回った場合の有効率は 100% であった。MRSA 検出菌の消失・減少率は 69.2% と既報よりも高い結果であり、高用量投与における副作用発現頻度が高まることはなかった。

【考察】MRSA 肺炎および敗血症に対する ABK 投与方法は、初期投与量を $5\sim 6\text{ mg/kg}$ 以上とし、 C_{peak} を $15\mu\text{g/mL}$ 以上、 C_{trough} を $2\mu\text{g/mL}$ 未満となるようにコントロールすることで、副作用発現率を低く抑え、より高い臨床効果が得られると考えられた。(ABK 用量検討研究会)